



# 創立50周年機に打ち出す 「英国式教育」の展望



立教英国学院（イギリス西サセックス州）は今年度、創立50周年を迎えたのを機に「アカデミック学校教育将来展望」と名付けた教育改革方針を打ち出した。英国に立地する全寮制学校という強みを生かした「英国式教育」により、世界の諸問題に対応できる国際人の養成を図っていくのが狙いだ。10月20日、岡野透校長にオンラインで取材し、進行中の教育改革の取り組みについて聞いた。

## 学校の使命の変化に対応して 教育改革を進める



創立50周年を機に教育改革方針をまとめた岡野校長

「本校が創立された1972年当時は、駐在員家庭のお子さんたちを中心に、英国にいても帰国後に日本の受験に対応できるようにすることを、教育の主な目標としていました。しかし、企業が駐在員を減らす傾向にある一方で、社会がグローバル化し、出願者や保護者の間に、寮生活による本格的な「英国式教育」によって世界に通用する実力を付けたいというニーズが高まりました」。岡野透校長は同校の背負う使命の変化についてこう語る。

2000年代からは、英国在住日本人家庭の子供だけでなく、同校ならではの「英国式教育」を希望して日本やヨーロッパ、アジアなど世界各地から生徒が集まるようになったという。「そこで、2019年に私が校長に就任してから推進してきた教育改革を集約させるため、創立50周年を機にまとめたのが、『アカデミック学校教育将来展望』です」

岡野校長は、「英国式教育」の真髄は「クリティカルシンキング」にあると考える。「日本の教育でも近年「考える力」を提唱していますが、本校では1990年代から自分で考える力を養う教育を行ってきました。授業を聞いて教科書の内容をただ暗記するのではなく、情報を精査し、それが何を意味するかを理解し、自分ならではの考えを言葉で表現できるようにする。新たな教育改革により、来年度からこの方法論を全教科で実践したいと考えています」

既に一部の科目では、取り組みを始めている。イギリスのカリキュラム「GCSE」の国際版である「IGCSE（国際中等教育修了証）」に基づく中3から高2の授業では、たとえば全生徒が「生物（バイオロジー）」を英語で履修し、実験を通して探究力を養い、英語でレポートを書く力を磨いている。社会科では、歴史上の出来事を単に事実としてとらえるのではなく、なぜそのようなことが起こったのか考察することを重視する授業を行っているという。

「英国式教育では、まず『どのような力を伸ばし、どのような人間を育てたいか』というゴールを設定し、そのために何をすべきかを考えます。例えば歴史の授業でも、『民主主義を守る人間になる』という目標を立て、社会の中で民主主義がどのように脅かされ、それを守ってきたかという視点で物事をとらえます。ウクライナとロシアという現在の問題についても、自分なりの歴史観からとらえることができるようになるのです」

## 英国式教育に追い風となる 立教大学の推薦上限撤廃

今回の教育改革と並行して、改革にとって大きな追い風となる推薦入試制度の変化も起きている。現在、同校から立教大学への推薦入学は1学年25人までを上限としており、条件を満たしていても推薦を利用できない生徒がいるが、2025年度入学からは、一定の基準を満たせば人数の制限なく立教大学への推薦入学が可能になる。

「日本の大学入試制度も変わりつつありますが、クリティカルシンキングにより英語で発表する力を持つ本校の生徒にとっては、一般受験よりも、在学中の活動や面接などで力を測る推薦制度のほうが適しています。英国など海外大学への進学者も年に延べ10人程度いますが、海外の大学への出願も、学力だけでなく、将来どのように社会に貢献できる人材であるかを、書類や面接で見るのが主眼となっています。最近はヨーロッパの大学でも英語で授業をするところが増えており、本校の生徒に有利な条件がそろってきていると言えます」

施設面での整備も改革の重要な柱だ。同校は、25年までに新たな男子寮を1棟、27年までに新たな女子寮1棟を建設する。現在の寮本館は30年までに全面改修し、教職員室、面談室、談話室、カウンセリングルームなどを備えた管理棟としての機能を持たせる。

これまで寮には教師が宿直として滞る制度となっていたが、新たな寮では専任の教職員が寮



「IGCSE」に基づく授業を受ける生徒たち

監として暮らすようになり、学校全体で「大きな家族」のような共同体を目指すという。

「キリスト教教育に基づき、人としての在り方を学ぶのが本校の大きな特色でもあります。小学部5年生から高等部3年生までが同じ寮の中で生活することで、身近なところにいる人を思いやる気持ちが育ちます。寮監は生徒の生活を日夜見守ることで、人としての成長を促すことができます。日常の中で身に付けた他者への配慮は、将来、多様な国際社会の中で生きる上で大いに役立つでしょう」

## 地域との交流を通じて 人としての成長を図る



地域とともに秋の文化祭「オープンデイ」を楽しむ生徒たち

改革では、人としての成長を図るうえで、寮の共同体生活を超越し、地域社会との結びつきを強めることも目標としている。例年秋の文化祭「オープンデイ」は、地域住民を迎えて開催されている。新型コロナウイルス感染症の影響により、昨年は来場者を英国在住の保護者や地域住民に限り開催したが、それでも1日300人ほどが集まった。今年10月16日のオープンデイには日本に住む保護者も訪れ、約500人の来場者を集める盛大なイベントとなったそうだ。

「普段から地域住民との交流会を開催し、近隣の学校との意見交換を進めてきました。今年はケンブリッジ大学での夏休み研修も再開しました。英国にあることの地の利を最大限に生かし、生徒に多様な機会を提供していきます」

同校の生徒は、日本の保護者や関係者から「日本にいる中高生と比べ、人の顔を見て話すことができる」と言われるそうだ。「人と顔を合わせて話すのは、国際社会の基本です。欧米人は日本人よりもマスクに対する抵抗感が強いと言いますが、これは相手の表情が見えないことに不安を感じるからでしょう。本校の生徒は外部の人と接する機会が多いため、人の顔を見て話すことに慣れていきます」

同校は近年、海外に住む子供たち以外にも教育の門戸を広げてきた。今後は奨学金制度を整え、海外経験を希望する日本の地方の子供たちにも機会を提供していきたいという。

「長期の休みには日本の家族のところに帰省していますが、本校に戻ってくる時、生徒たちは「立教英国に帰る」と話そうです。これからも英国にあるもう一つの家族として、生徒たちの自主性の成長を支えていきたいと思っています」

（文：足立恵子 写真提供：立教英国学院）